

お ぶち し ち
小湊志ち名を馳せた明治の女性技術者
— 玉糸繰糸の先駆者 —

小湊志ち (1847 ~ 1929)
出典：『小湊志ち』昭和7年

■上州生まれ、豊橋で花開く

小湊志ちは並一通りでない生涯を描いている。鈴木開道著『小湊志ち』によれば、1847(弘化4)年に群馬県の製糸産地で生まれ、幼い頃から繰糸の技術を習得し、勤めた製糸工場では模範工女となり、自宅で小工場を持つほどであった。しかし夫からの暴力など精神的苦痛が続き、32歳のとき、隣村の中島徳次郎と出奔する。その途中、渥美郡二川町(現・豊橋市二川町)の地で繰糸の技術を教えたことがきっかけとなり、二川町に定住することになる。1879(明治12)年7月には、地元の協力を受け工女12名の製糸工場を立ち上げる。豊橋での志ち最初の工場であった。その後工場を転々としながらも工女を25人、30人と増やし、1885(明治18)年になって、後に糸徳製糸となる二川町の土地を購入し、名実ともに自社工場を持つことになった。そして、1892(明治25)年には志ちが開発した玉糸繰糸を専業とする玉糸工場に衣

替えをする。後に豊橋の一大産業となる玉糸生産の先駆けとなる玉糸専業工場であった。

■玉繭(屑繭)の繰糸技術を開発

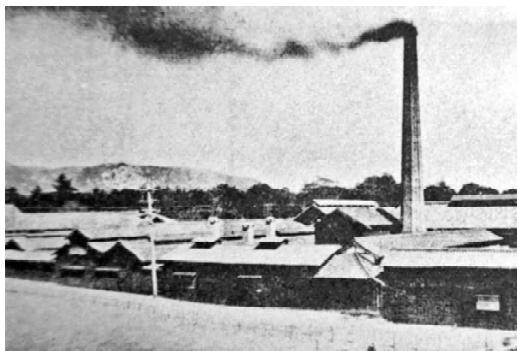
玉繭とは蚕2頭以上で一つの繭を作った玉状の大ぶりの繭をいう。玉繭は繭糸が絡まっているため、通常の製糸はほとんど不可能であった。そのため屑繭として廃棄されるか、繭を手で開いて広げた真綿として、また一部の紬糸として利用されるしかなかった。

これに着目したのが志ちであった。当時は養蚕技術も途上で玉繭などの屑繭が2割前後出ることもあった。玉繭から糸が繰れるようになれば織物にも利用でき大きく世のためになる。そう考えた志ちは、日夜その繰糸法開発に明け暮れ、1892(明治25)年に開発する。志ちが考案した玉糸繰糸法は、後の豊橋で大きく発展した玉糸繰糸法から考察すれば、まずは煮繭技術の改良にあったと思われる。繭をほぐし、繰り易くするための釜の湯温とその時間だったであろう。それに、これは詳らかでないが単繭と玉繭の配合割合と、苛性ソーダなど微量の薬品注入もあったと思われる。そして座繰機による繰糸技術である。よく知られるのが玉繭の糸口を取り出すための独特な箒の開発であった。上の写真の工女が右手に持つ箒である。当時はほうき草(モロコシ)が広く用いられた。



糸徳製糸第三工場での繰糸風景

出典：『蚕糸ふたがわ—小湊志ちと女工の生活—』1976年



糸徳製糸本工場 (昭和4年)

出典：『玉糸の町豊橋—糸徳製糸—』昭和62年

■豊橋は全国一の玉糸産地に

糸徳製糸は、無籍者の罪で獄中死した夫徳次郎の徳の字を取っている。後に第三工場まで拡張し、志ちが亡くなる1929(昭和4)年頃には、釜数828、男工100人、工女900人の大工場となる。豊橋を中心とする三遠玉糸製造同業組合員数も大正時代には100工場を超え、玉糸生産も全国の約半数を占めるまでに発展する。

その玉糸製糸発展の功労が讃えられ、1913(大正2)年に名古屋離宮において豊田佐吉らとともに、女性としては初めての陛下の拝謁を賜っている。そのとき、質素な生活をしていた志ちは礼服を持ってなく慌てて調べたとのエピソードも残っている。

(天野武弘)